

語い数を増やし、気持ちや要求が表現できる子

— ダウン症児のことばの指導を通して —

石 脇 紀美子

1. 対象児のプロフィール

生徒名 S. Y (女) 昭和48年11月4日生 (中学部1年) IQ 測定困難

語い年齢 3才2ヶ月 (PVT) 本校小学部より入学し現在に至る ダウン症

極度の肥満のため動作が緩慢。歩行も他児より遅れがち。手先の器用さに欠ける。明るくて人なつっこい反面、非常に頑固で、少しでも気に入らないことや気のりしないことがあると座り込んでしまい全く動こうとしない。音楽が好きで、リズムに合わせて体を動かしたり、調子を合わせて歌ったりする。言語は不明瞭で、語い数も少なく、話をしようという意欲に欠ける。たびたびスカートめくりをしたり、「パーカ」等と言って人の注意をひこうとすることがある。

2. 問題点とテーマ設定の理由

今年度より中学部に入学してきたS児の様子を見ていると、かなりの理解言語があり指示はほとんど聞きとることができるが、表出言語が乏しいことが気にかかった。ダウン症特有の構音障害もあるが、音節の省略も多く、最後の音だけを言ったり(リンゴ→ゴ)、途中の音を省略したり(バナナ→バーナ)して、特定の人でないと会話が成立しない実態にあった。

しかし、昨年度よりS児に話をしようという意欲が少しずつ芽ばえつつあるのか、本を見ながら声を発したり、音楽に合わせて歌を歌ったり、指導者の口形を模倣したりして発語が増えてきている。ちょうどこのような時期に、言語環境を整えて、話す機会を多く設け、言語指導をしていくことは、S児の言語意欲をさらに高め、少しでも語い数を増やして自分の考えや要求を人に表現して人とのコミュニケーションを深めていくのではないかと考え、この研究に取り組んだ。

3. 指導の重点と手だて

ダウン症のため機能的な構音障害があることを認めながらも、次の点に重点を置いて取り組むことにした。

- 数多くの言葉を取り上げず、同じ言葉を繰り返して指導して、自信を持って言えるようにする。
- 毎日の生活の中で、S児が使用する言葉や、簡単な言葉で指導する言葉や劇の台詞を考える。
- 細かい注意を与えて、しゃべる意欲を失わせないように心がける。
- 日常の会話を大切にして指導を行う。

以上のような点を考えながら、特に次の三場面に重点を置いて指導を行った。

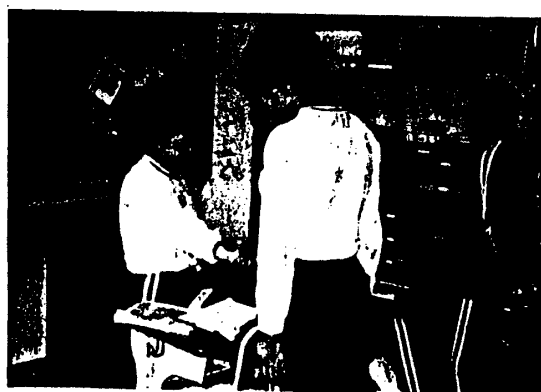
	S 児の学習内容	手 だ て と 配 慮
朝の活動	1. あいさつ 2. 歌・合奏 3. 日記の発表	1. 毎朝「〇〇さん、おはようございます。」「〇〇先生、おはようございます。」と大きな声ではっきりと言わせる。口形模倣をさせながら一音一音を正しく言わせる。 2. 小学部から慣れている歌を用い、少しでも自信を持って声を出させる。音楽に合わせて動き、席を離れることがあっても自由にさせる。ピアノは単音をリズムに合わせて吹かせる。 3. 毎朝、名前ときまった言葉を言わせる。口形模倣をさせながら一音一音をはっきりと言わせる。
カードあそび	1. カードを取る 2. カードを読む	1. 一つの言葉をはっきり、ゆっくり言って正しく聞きとらせる。わからないカードについては名称をしっかりと教える。 2. 読むカードにも絵を描いておく。聞きとりにくい場合は何回も読ませる。日常生活でよく使用される物をカードに描く。ゲーム的なことを喜ぶので何人かで取り合って遊ぶ。
劇練習	1. 劇「三びきの子ぶた」の練習 ① 動きの練習 ② 台詞の練習 2. 大山林間学校で発表 3. 児童生徒集会で発表	1. 劇練習の時間だけでなく、休憩時間などにも話をして、劇の流れを覚えさせる。 ① 楽しい音楽や歌を組み入れて大きな動きをさせる。 ② 日常生活の中ですでにS児が使用している言葉をできるだけ多く入れ、無理のない台詞を与える。 2. 3. 大道具や衣装を用いて自分の役をしっかりと自覚させる。

4. 指導実践例

(1) 朝の活動より

① あいさつ

4月当初、学級の先生や友だちの名前を覚えていないこともあって、人と向いあっても「いけーん」といって黙ってしまうことが多かった。教師と一緒に言わせるようにした。5月になると、人の名前も覚え、友だちにあいさつしたり、声をかけるようになってきた。また、声もしだいに大きくなり、朝の会の司会も自分がするといって友だちを押しつけて前に出るようになった。



基本となる言葉	4 月 の 実 態	9 月 の 実 態
◎山本君、おはようございます。 ◎横山さん、おはようございます。 ◎今日の日付け 山本君おねがいします。	◎やま(もと)くん、(おはようございま)す。 ◎よこ(やま)さん、(おはようございま)す。 ◎き(よう)の ひ(ず)け。 やま(もと)くん、おね(が)い(しま)す。	◎やまーとくん、おはようござわす。 ◎よこやまさん、おはようござわす。 ◎きょーの、ひつけ やまーとくん、おねがいわす。

② 歌、合奏

小学部よりの既習曲「野ねずみの歌」「ひげじいさん」はS児なりに歌うが、中学部からの新しい曲になると身振りもなく、声もほとんど出ない状態であった。そこで、

- ① テンポを遅くしてS児が少しでも声が出やすくなるようにする。
- ② 教師がS児の前で一緒に振りをつけたり歌ったりする。
- ③ 前に出して、みんなの注目をあびさせ励ます。

以上のことに留意して毎日繰り返し指導した。次第に、今年取り組んだ曲にも慣れ、曲に合わせて振りをつけて歌うようになった。二学期になると「S子さん、S子さんどこでしょう」という問いかけの歌に対して、「ここです。ここです、ここにいます」と振りをつけて答えたり、グー・チョキ・パーの歌に合わせて器用に手を使って歌うようになった。また、ピアノカ演奏も練習の成果が見られ、始めは単音を二、三拍吹いていたのが、今ではタンキングが徐々にできるようになり、単音ではあるがリズムに合わせて楽しく吹くことができるようになった。

③ 日記の発表（自己紹介）

文字の習得ができていないS児の日記は4月からずっと名前だけの練習帳である。日記発表の時は必ずそのノートを持って喜んで前に出てくる。そこで、この時間に名前とあいさつを言う練習をさせた。わたしの名前はS・Yです。どうぞよろしくおねがいます。とゆっくり、一音一音をていねいに言わせるように留意した。4月24日の新入生歓迎会、5月16日の遠足、6月の教生との対面式など、マイクを使って上手に言うことができた。そして、7月になると、「きのー、かるたをしました」「きのー、プールにはいりました」などの言葉が、たどたどしくはあるがつけ加えられるようになった。

(2) カードあそび

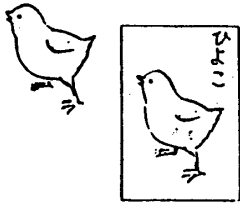
S児はかるたやトランプあそびが大好きである。登校して着替えが終わったあと、休憩時間、バス待ちの時間など、毎日必ずとっていいほど一人でカードを広げてかなり長時間集中して遊んでいる。



そこで、「ことばのテストえほん」（田中恒夫、笹沼澄子共著、日本文化科学社）を参考にしてかるたカードを作り、遊びながら発音指導・言語指導を行った。この試みはS児の興味をひき、毎日絵カードを机いっぱい広げては、文字カード（絵入り）を大きな声で読みあげて、自分でカードを取ったり、友だちと一緒に遊んだりしている。このカードあそびによる言葉の変容は次の表からもわかるように、語い数が増えた（5月段階18語理解から10月段階28語理解）と同時に、音の省略が減り、これらの単語に関しては構音障害も少なくなり、かなり聞きとりやすくなった。そして、現在ではカードをさらに増やして毎日繰り返しの学習を行っている。

※ カードによる単語練習の経過

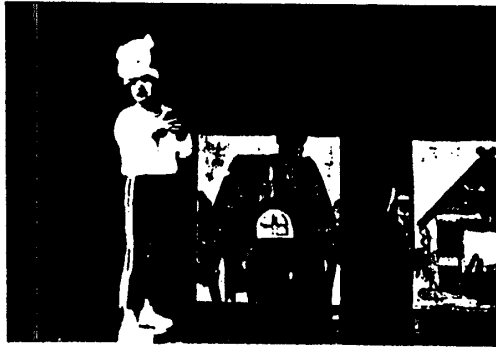
単語	5月段階	10月段階	単語	5月段階	10月段階
あひる	とい	はひる	くるま	くゆま	くんま
いす	いしゅ	いす	りんご	いんご	りんご
えんぴつ	えびつ	えびつ	きりん	きいん	きいん
かぎ	とんとん	かぎ	じてんしゃ	じっしゃ	じんしゃ
きんぎょ	おさかな	きんぎょ	はさみ	(はさ)み	あさみ
こいのぼり	こーぼり	こいのおり	らっば	ばっば	らっば



※ 30種類作成

(3) 劇練習

10月に実施した大山林間学校と児童生徒集会のクラス発表に、「三びきの子ぶた」の劇に取り組んだ。本学級の生徒3名、教官2名で毎日劇の練習をした。始めは劇の流れが理解できず、自分の出番がわからなかったが、繰り返しの練習により、自分だけでなく友だちの出番もわかるようになり、次第に自信を持って台詞が言えだした。さらに、小屋やレンガ、お面などの大道具や小道具、



音楽などが準備されると意欲もさらに盛り上がり、「も一回、も一回」と言って練習の繰り返しを要求したり、自分から道具を持ち出して進んで練習にのぞんできた。

発表の日は、今まで以上に動作も大きくでき、最後まで、見ている人にとってもよく伝わる劇を演じることができた。

5. 考察及び今後の課題

以上のような取り組みの中で、S児に次のような変容が見られた。

- ① 以前は、「これ、これ」と指差して要求を表現していたものが、「～してください」「〇〇をください」など、その場に合った要求ができるようになった。
- ② 「ありがとう」「もういい」「いけん」「いいよ」「あつい」など、自分の気持ちを表現する言葉を使用するようになってきた。
- ③ カードあそびの経過からもわかるように、発音上に問題がありまだ聞きとりにくいのが、物の名称をよく覚え、それを生活の中で使用することができだした。
- ④ 「パーカ」「ケケケケ」などの人の気を引くための言葉が減ってきている。

S児は、ダウン症特有の機能的な構音障害があり、人にはかなり聞きとりにくい点もあるが、一音一音ゆっくり反唱させたり、口形模倣をさせたりすることが効果的であったように考える。また、S児の好きな歌やリズムを利用して解放的な気持ちで声を出させていくことも大変重要なことであったと考える。しかし、それと同時に、呼吸・発声訓練、構音器官の訓練など、養訓的な訓練をしていく必要性も感じている。このようなことを考えながら、今後さらにS児の言葉の指導を繰り返し取り組んでいこうと考えている。